

ひとはく通信

ハーモニー

107

Dec. 2019

特集 館外企画展 Japan Color

京町家・花洛庵で開催されたWhere Culture Meets Nature 展



兵庫県立
自然の博物館
Museum of Nature and Human Activities Hyogo
<http://mnhcku.jp>

植物染色による布と材料となる植物標本(協力:よしか工房)

一実物があることの意味一

博物館の収蔵資料は様々な用途に活用されています。一番わかりやすいのは展示物としての利用でしょうか。VR/AR技術の進んだ昨今ですが、実物のもつ迫力、存在感と情報量にはかないません。

ひとはくでは、他館から依頼を受けて資料貸出も学術利用も行っています。生物や岩石鉱物の標本資料には採集日や採集場所が記されているので、資料となったものがその時その場所に存在したという証拠になります。他大学や博物館、市井の研究者まで様々な人が、研究に博物館資料を利用しています。その他市町村、都道府県、国のレッドデータブック策定の基礎資料としても使われます。

最近は技術革新によって標本からのDNA抽出が可能になり、博物館の生物標本に熱い視線が注がれています。

ただ収蔵資料を良い状態で子や孫の世代に受け渡すことも、博物館の重要な使命の一つです。活用と保存のバランスを上手にとる必要があります、そこが悩みどころです。

高野 温子(自然・環境評価研究部)



写真1

若冲の動植物絵に描かれた昆虫標本
2016年「日本文化を支えた自然」展
京都市中京区 野口家住宅



写真2

ひとはくの植物標本情報に基づいて作られた植物誌・レッドデータブック等

トピックス

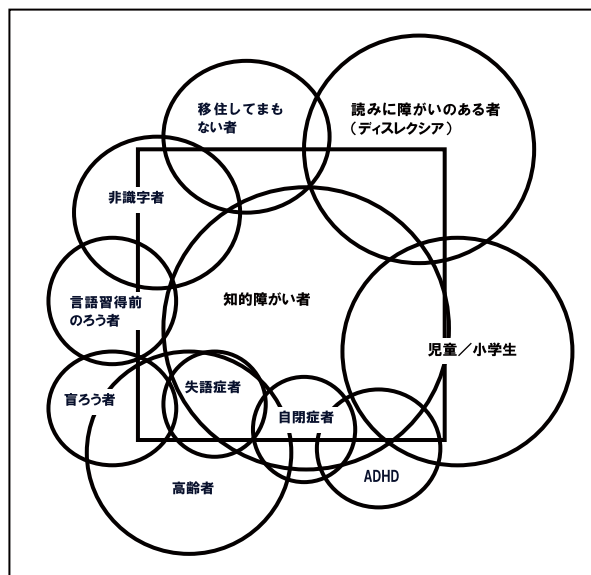
ひとはく活用術

一さまざまな人を包み込むには一

生涯学習施設はすべての人に気持ち良く学べる場を提供する義務があります。ですから施設職員には知恵が求められます。インクルーシブな知恵のことです。

それにしても赤ん坊や母語の異なる人、ろうや盲など感覚モダリティの異なる人、それに脳が認知できない失認者にはどう対処すればよいのでしょうか？ 簡単には言えません。それでも努力を続ける必要があります。館員の側に障がい者がいると大変さがよく分かります。そうした努力の例が「読みやすい図書のためのIFLA 指針」です。これは国際図書館連盟へのレポートを日本障害者リハビリテーション協会が訳したものです。2012年にも改訂版が出ていますが、この図は載っていません。

三谷 雅純(自然・環境再生研究部)



「読みやすい図書」の対象となる人びと

「読みやすい図書のためのIFLA指針」[<http://archive.ifla.org/VII/s9/nd1/Easy-to-read-50-jp.pdf>]を改変の上、三谷(2013)「人と自然」[https://www.hitohaku.jp/publication/r-bulletin/No24_04-1.pdf]に引用。